



近世名家書畫談二編

四





近世名家書畫談二編卷之四目次

- 戸田茂睡翁異傳
- 居了然の傳
- 播州加茂山の三大字

附録

- 文字の起原
- 画圖の濫觴
- 畫法諸體古より備る事
- 畫の徳世の治乱小預る事
- 諸先生真跡落款式附





近世名家書畫談二編卷之四

戸田茂睡翁異傳

雲煙子 安西於菟編次

戸田茂睡初名八兵衛後渡邊茂右衛門恭光と云梨本菴  
まゝ寒露軒と号も寛永六年五月十九日駿府御城三九  
あて生る渡邊監物忠が六男なり父の忠は戸田と五君の忠  
勝が次男渡邊山城守が智養子と成り後駿河亞相公老  
小命せしま六千石城賜り後亞相公沙事して下野那須郡  
上庄黒羽小閉居を此時翁八四才なり後沙免して江戸小  
住をその兄渡邊久左衛門善石七千より合力城受り伯父



戸田右衛門が許小養をる此時伯父の厄介やくわいにて本多家  
忠小仕ちこ三百石賦賜ふ書付今信州小あり即本郷森川  
宿邸中しゆくてい小住門小大樹おほきの梨なしありし賦あづかりて梨本菴と  
号せりあり戸田ハその儘まま伯父の氏うぢ賦名なのりしその後延  
寶たからの末すえ羊ひつぎ小仕賦あづか辞ことして金龍山の邊小居住すまむと紫  
の一本ひとこ小見みゆゆの額かみ有あ草菴くさあんの記きと云我聞きこ大隱おほいん隱ひん於お市  
朝あさ粵えつ有あ戸田氏某者と居す於お湘左良位しやうざりやうい數十步とせふ之外  
非山非浦所謂すゐ隱市朝者也其菴雖小而又獨立群  
家多絶景矣遠望山櫻則思荆公之吟うた近見川流かみ感  
夫子之言云云

熊くま小こ阿あまま虎こああののまま涉せつ兼けん小こああききままをを推おしるる言こと  
小笠原俊長大人が考小紫むらさのてそとハ此公このこう羽はが著述ちやくしゆをを隱名いんめい  
賦遺佚いゆいとせし事ハ茂睡しやうすいが深意しんいありての事ことありてしその  
序文しよぶん小遺佚いゆいして怨うらみざるハ淺草せんくさの隱士いんしの氣味きみありと彼柳かやなぎ  
下惠かみが遺佚いゆい而不怨をうらま厄窮やくきゆう而不憫をあはれし行ゆひ賦あづかるる其その身  
幼わかみて下野國那須しも放棄ほうきせしままてて毛怨けうをを免めんの上  
浪人なみのりと成なて困窮くんきゆう小至こままととを清貧せいひん賦樂あそんでしううままととの意  
賦含あめて遺佚いゆいの字賦切出きりだせしありしと云い此説このせつ大おほ小こ當  
ままりりと思おもははるる

予友信州の人市川信壽が花はなせる戸田元周筆記ふだのね二冊あり



是城見し小翁ハ紀州の人あり中畧當金龍山の麓ニ居住身  
 かくま家といふ名歌より人舉て隱家茂睡と呼び則ち  
 ち山と云其名國之所と小有と之とをさだめりしと云る城  
 當山城待乳山と相極る事茂睡翁より始る此翁隱遁乃  
 こぎり愛子小かくま高野山登りし時大磯の鴨立澤也  
 哀きさハヤと人の袖をうて鴨立澤小残まことの葉  
 といふ歌城石碑小残し其節この山を一首城苗免あきぬ  
 光陰つり昔と成り傳るるこままうてなる小情有人乃  
 此節右の歌のころ城様小ちりども見しらぬ人の眼小ゆ  
 ち又歌の徳あるべしまこと小結縁の種とをあるべしと云る

ぎい城感どりけあさかぎりあかぬの法師入道六予  
 がゆりたり一人あまばまなる道のとの葉城手向の香花  
 とをあらんといよのぬ三十一文字とりむぎ綴り石上小  
 備へ拜伏を懐舊のころ城 戸田勘右衛門元周拜上  
 何いまさハいと我身のまのち山夕越行とあらぬ人のち  
 市川信壽云元周幼名薩太郎後勘右衛門と改宍ハ茂睡  
 二男あま共かのまことかくせしより信州佐久郡相木  
 村向平と云まあて遁世閑雅又和歌城よくま詠歌茂睡が  
 鳥の跡小數首出たり歌林尾花が末を花のころ小  
 しままハいらひ安く見ぬ色小嵐をころを花のころ城



真蹟卷軸三十首の中名初ふゆきと今こふ出ま  
竹内雅庸御点あり

山

法師茂睡

待乳山とてゆきと今こふ出ま  
竹内雅庸御点あり

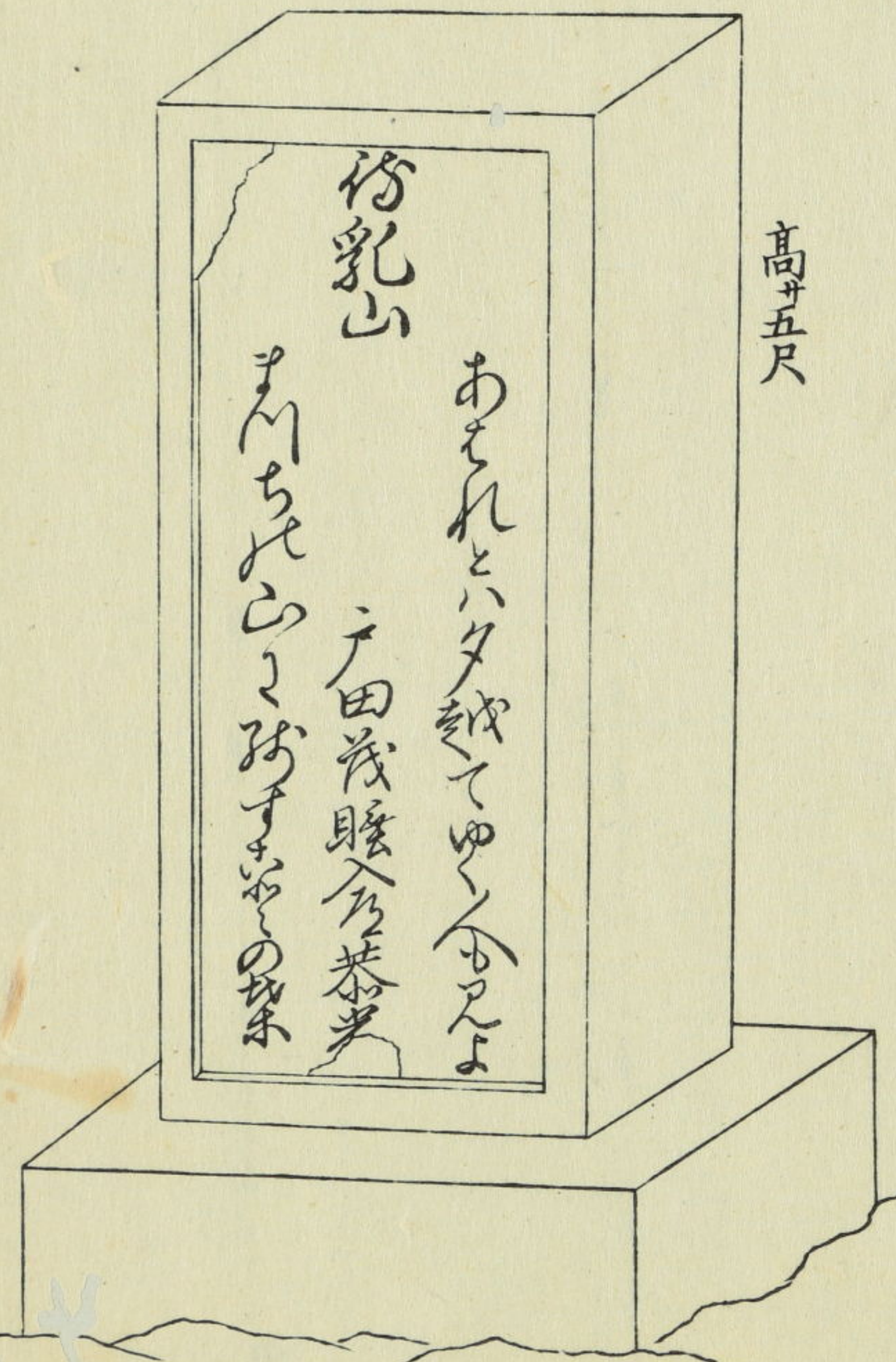
待乳山 金龍山本龍院

天台淺草寺末

聖天宮社右之方立碑

聖天町

高五尺



待乳山

あまれとハ夕夜てゆきと今こふ出ま  
法師茂睡  
天田茂睡今茶美  
まうちれ山とてゆきと今こふ出ま



おのどあり元文二年八月十日没徳岩道祐居士同所禪宗大  
龍寺小葬る

按る小元周ハ茂睡翁の二男なる微細ハ未だ考むる人  
翁城紀州の人といハ如何なる故也由縁あることなるべし  
男伊右衛門ハ茂睡故ありて續一之び本氏渡邊城名のは  
一他より弥三郎城養子して戸田の名跡城継一之び  
更城きてあま時ハ二男ハなきと思はる志なき共信州より  
墓所あり或ハ所縁の家ありて書跡をど出さる城見まば  
又いふなりや委細ハ信壽追て事跡を贈るより一嗣篇小  
載まづ一又元周夫婦生涯の俸禄江戸より来るより

里老傳云何家よりとい事城志む予信州より出る所  
の茂睡翁歌三十首又七首の巻軸城得たり既ハ真跡城雙  
鈎して梓行を其中彼名歌城載ま

ちりの世とあそふ心元つきてハ身のうきま家の山とあそふ  
隣女悟言ふをあそふのといて山とありたりとあり萍の跡  
ふいといふのとい山とこそあまをありといま元後人の誤傳ハ  
一そのハ茂睡翁真蹟ハ是まで世上小ある事稀なり故ハ  
輪池屋代翁檜山成徳老をど常小見まく欲せしを遂ハ  
知らむして世城去りしを遺憾少くむ古筆了伴大人  
此信壽が持来るさまの巻軸城見て初てかくのごとき真跡



城見たりとて大に感賞せしむるは是まで埋まらざりし  
その信州の山中より出ると八宮小田野山林小大賢の  
ことと亦このこととを思ふ

又信壽茂睡翁自筆五色御舍利傳記城持来故ありて  
予の所藏とあるその文小云五色の舍利ハ駿河今川家相傳  
あり今川義元の母儀駿河推野の寺城信仰也今世後  
生の為として此の舍利城去いの小納忍らるる其時の住寺  
の後住小興津豊後守といひ一人の甥坊主なるあり興津  
豊後守ハ原上野介が智也則原六郎が妹智ありとあるの  
母清芳院ハ原六郎が孫娘ありとある父渡邊監物駿河

府御城代被 仰付妻子共小府中河城小あり小より右の縁  
城以て去いの住持と念以あり此住持年寄りかごがををといふ  
云一隐居一跡城駿河安西のまい光寺の 渡邊山城守が 且那寺あり 住持小  
ゆづる月日経て隐居老命あやうき城間き清芳院 病惱城  
とつたゆ云と 下是翁幼稚駿府小あり一事の証あり其出所  
亦このことと一餘ハ紫の一を畸人傳萍の跡城を考へ  
男伊右衛門 渡邊氏名覚 十八歳を没 の事跡ハ諸書小ゆづつてこりり載せ  
浅草新寺町白雲山金龍寺小夫婦の墓あり  
憑雲寺ありの本の茂睡 寶永三丙戌年四月十四日  
思ひ跡を事こそなるを有てうき命のまを城々小向て



雲操院捨山ていり 元禄十二己卯年二月廿九日

結ひ何りや黒髪成契りよて来あぐまをひりも愛

又信州相木の郷大龍寺 此寺茂睡翁以中興 墓又過去帳あり

馮雲院殿寺山茂睡大居士 辞世

多つ来て准くといふ草の原露の命の何り一時あふ

尼了然の傳

了然禅尼名元総大休と号よ元来駿州富士の大官司葛山何某といふもの武田信玄の子成養て子といひ葛山十郎義久と号し其子長次郎と云京都泉涌寺門前ふ閑居して茶事成好とまゝ古画の鑑定成を以その以世人画見の

長次と称しぬ長次が妻元能書ありその一女即ち了然あり

東福門院小宮仕りやとり木といひ 女院薨御の後仕成

辞して家ふ何りか婚姻の事成人媒りたるが常ふ和歌詩文

成好と頗る禅味何る女あまは我嫁して子三人生あ暇成

賜はまきと約して松田晚翠と云醫師の妻とありて廿五の以

まて小男女三人の子成生と多まは夫ふ去りぐの事成ひ遂ふ

尼とあり黄蘗諸禅林ふ入りて参道ひまなく勤め後深

東ふ下りて弘福寺鉄牛和尚ふ法問の事成とて元其谷色

美ありて艶ある故小寺門ふ入ること成ゆるまはばそまきあり

木菴禅師の弟子白翁和尚の駒込の菴りふ在る成きうて



此圖元禄二年  
板本江戸賢女  
さよ衣として其  
ころの貞賢坊  
集り画入す本  
小載せしる妻  
川師宜の画より  
臨寫して其ころ  
のきぬ紙のり



徳川書局刊  
卷之四

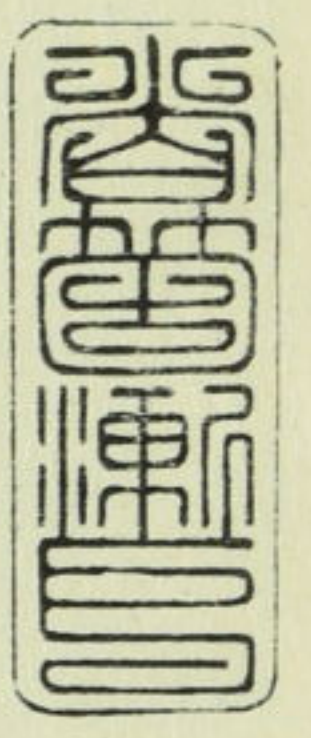
七

高隆寺



徳川書局刊  
卷之四





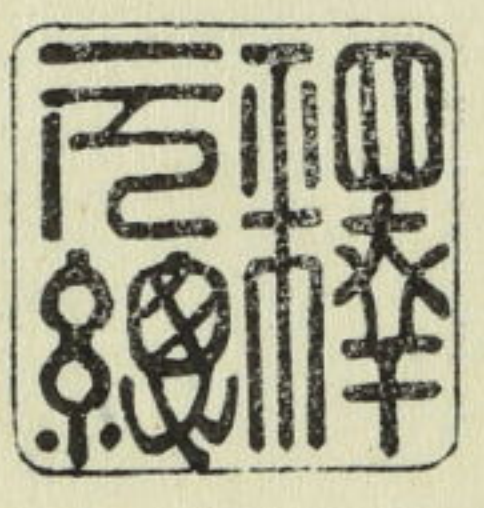
探春月勝秋月之句

心美字

来也海秋秋月少思者  
来、落志驚と一宵此是  
再往還去然遊情 對

名実

了然福



尋問して法問のこと紙福くよ白翁をまゝ美色して尤容  
儀紙そのつること紙あがりて佛法小意ある者ハかちの美  
る紙好まひまゝて容儀紙そのよびさいはまなり一其こちあて  
ハ寺門小何んこと紙恐るまゝて在任のるふ處を即座  
小席紙追拂よひつゝまゝり了然力あくして立きりある家小入  
て去りぐのこと紙語り傍ふ何り多銅器紙火中ふい運その  
内はこ一物紙案を體ありぐつゝ銅釜の深赤り



かり多し我あつて面頰ふおしめて全顔ぜんがん成なりことごとく

焼爛せうらんして南筆なんひつ成なりて

燎面皮頌

昔遊宮裡焼蘭麝しょうらんじや今入禪林燎面皮しょうめんひ四序流行亦

如此不知誰是箇中移。

いづる世ふまてたく身やうはし終の薪と思ひぎりせば

とく吟詠ぎんぎやうして後白翁和尚ふまて一ひと六和尚ろくおんを大おほふ感かんじ

在位ざいゐ成なりゆるせり後鎌倉こうまぐらふ位所ざいじよ成なりをもと知んといひてまよまよう成なり

きこて遺佚いゐつ戸田茂暁と云人菴室あんしつふ行ゆて

水草の清きころのこと志なき里成さとなりふよそふまひまひをためて

とありしころ然

皆人のさぬことまきのそまぢのそつらつてつらる世成よこるむむ

おひでまころつ巻軸まきわ成なり遺佚いゐつふあつて是ハその以江戸えどふ名

ある歌うたぶらう書かきあつて知しるもそのありわりむらさむらさね元禄四年板本と云

書かきより枝萃えだませしありその内うちふ了然りやうぜんが歌

君きみのあつりさぬ成なり跡あとを草くさの跡あとを形見かたみと見えよ

予が所花短冊小

寄露釋教

きあつと見えまはまわく露つゆのき定さだまき世の諸しよの教きやう

後武州落合村泰雲寺あむしうらくがひむらたいうんじ開基あききを共とも居あるまは白翁はくおん成なり



一本誰作久

初代とて二代と稱せしあり正徳元年辛卯九月十八日  
没を辞世の詩とて或人の見きりきり  
六十六年秋已久凜々月色向誰明。莫言那裡不  
夫事耳。熟松杉風外聲。

駿州駿東郡葛山城主葛山播磨守元重尾州田樂ヶ窪

葛山備中守勝嘉生害信州伊奈郡法善寺葬法善寺武田信玄建立

葛山播磨守長嘉愛智郡省掛

信玄六男

葛山十郎義久

始信貞母油川某女  
天正十年三月十二日生害甲州新善光寺葬

葛山宮内久敬

幼名龜丸

宮内為久

小名鍋太郎  
稱長二郎長爾又鉄齋

了然居士

葛山長十郎

女桃仙女史

林家門以儒業仕南紀  
子孫葛山六郎右衛門現在

南方紀傳二  
建武八年八  
月八日葛山  
備中守經信  
トアリ

播州加茂山の三大字

伍石先生の息文峰先生八家学ふて能書の人あり草聖彙  
辨其外小毛此先生の校訂せしきし摸刻未あり惜むる  
文政四年の春三十二歳ありて没を翁外小子あり其哀  
悼りしるる人其少年の日湯小筆試し三文字あり  
道勁ありて斌媚斌ぬ絶作と云べし往年天保七年伍石翁  
姫路の大夫小随逐し其藩小往き日その封内の石の  
寶殿いんぎんどのの何よりハ山と云を石ありその石山城  
鏡削しと彼三大字城鑄鏤し不朽小貽縮易ト公翁公翁も亦  
幾ありしと下世を行年七十有四歳あり古より翰墨者流





張彦

司馬石柱終不成  
方圓誰嫁實洞名  
山雲石鏡三飛白  
松石叢揮蓋眼  
明 之山人





の説小大字徑丈あるハ作り難きものと云西遊して播陽に至る  
 人其鏗字城看て能書城知らるべし此小字城録するその子  
 翁の徳城志まじく水城飲て源城思の徴志あり昔王獻之少  
 年の時小父逸少と共小會稽小あり時小北館の聖壁の新小就  
 して淨白愛まじき城見て子敬献之帝城取来り侍者小命トセ  
 是城泥淖の中小涵浸ぎ免其聖壁一文四方の一ツの大字城  
 漫揮漫を意城用ひ多る小非一時の遊戯ある小結體多  
 勢位驚くべく愛まじく一日と觀るその市城ありふいある  
 義一日外より物り来り是城見て嘆称所親小書城  
 与て曰く子敬飛白大有直とその子城とるる讚美が

せきき一 事圖書會粹小見也

近世名家書畫談二編卷之四畢



附録

文字の起原

書畫談編次の因ふ前修（前）の因ふこと二三（二）て童蒙の  
 啓發（一）と云ふ猶是ふ就て聞見（二）は弘免（三）をバ此銷閑（四）の書（五）を  
 亦（六）学問の一助（七）を（八）べし先文字の始（九）は（十）淮南子（十一）訓（十二）本經（十三）の  
 昔蒼頡作書而天雨粟鬼夜哭（十四）と云ふ劉安呂不韋（十五）春秋（十六）  
 君守（十七）の門客（十八）杯（十九）の著述（二十）信（二十一）取（二十二）る（二十三）ふ（二十四）足（二十五）ら（二十六）ざる（二十七）と云ふ秦漢乃  
 古書ハ氣（二十八）ふ抹（二十九）撥（三十）ま（三十一）き（三十二）ふ（三十三）非（三十四）む（三十五）繫（三十六）辭（三十七）傳（三十八）ハ上古結繩  
 而治（三十九）後世聖人易（四十）之（四十一）以（四十二）書契（四十三）と云此文の上（四十四）ふ上古穴居  
 云と云ふ（四十五）鴻荒草昧（四十六）の時（四十七）より漸（四十八）と云（四十九）文物（五十）の用（五十一）る（五十二）

自然の理（一）にて文字（二）は何人（三）の作（四）ると云ハ臆（五）妄（六）小近（七）一蒼頡（八）は  
 黄帝（九）の史官（十）杯（十一）と云（十二）毛揣摩（十三）の説（十四）にて信（十五）む（十六）る（十七）ふ（十八）足（十九）ら（二十）ざる（二十一）と云（二十二）羅泌（二十三）の  
 路史（二十四）ハ倉帝（二十五）史皇（二十六）と云（二十七）ハ又古（二十八）の天子（二十九）ある（三十）べし然（三十一）る（三十二）ハ周禮（三十三）  
 の春官（三十四）外史（三十五）ハ三皇（三十六）五帝（三十七）の書（三十八）は（三十九）孔安國（四十）尚書（四十一）の序（四十二）左傳（四十三）  
 昭公十（四十四）二年（四十五）ハ據（四十六）て伏犧（四十七）神農（四十八）黄帝（四十九）の書（五十）は（五十一）三墳（五十二）と云（五十三）少昊（五十四）顓頊（五十五）高  
 辛唐虞（五十六）の書（五十七）は（五十八）五典（五十九）と云（六十）と云（六十一）ハ天地開闢（六十二）の盤古（六十三）氏（六十四）を過（六十五）ぎ  
 ハ業（六十六）已（六十七）文字（六十八）ハ人（六十九）有（七十）て制作（七十一）キ（七十二）ハ蒼頡（七十三）の初（七十四）て造（七十五）る（七十六）ハ非  
 ざる事（七十七）明（七十八）ら（七十九）あり（八十）譬（八十一）ハ漢（八十二）の高祖（八十三）天下（八十四）一統（八十五）の後（八十六）ハ秦（八十七）の苛法（八十八）  
 故（八十九）蠲（九十）き法（九十一）三章（九十二）と定（九十三）め（九十四）ら（九十五）る（九十六）夫（九十七）ハ天下（九十八）の女（九十九）故（一百）禁（一百一）ず  
 難（一百二）く蕭何（一百三）も（一百四）九章（一百五）の律（一百六）は定（一百七）め（一百八）ざる（一百九）如（二百）く蒼頡（二百一）ハ至（二百二）て



文字の数の蕃く成り多るなるべし  
 書史會要小云炎帝の穗書黃帝の雲書太昊の龍書少昊の鳳書顓頊の科斗書周の文王の史佚虎書武王の時禽書與書始るを等の説ハをとり荒唐無稽の言あるをと云書ハ画より生じ、そのと云城知る小足る六書の説ハ周禮の大司徒小出て其一の象形ハ○☾のまじり畫小をとづく事明白なり象形のとて天下の事物記載難々まじり會意轉注などの事出来り益々文字の數ハ増益せし事いづひあり結繩の後ハ幾程なく蒼頡ありもの出て文字城制作しつらと思ふ誤りあり

秦の蒙恬始て筆城造り後漢の蔡倫始て紙城製を  
 かの説を蒼頡制字の説小同潤色城加ふるの  
 創作小ハハハハ  
 董彦遠の説小丹鉛録小ハ鄴宋の時小臨淄小桐棺乃前  
 和棺頭城城掘り得る小齊太公六世孫胡公之墓と一惟  
 三字ハ古體小て餘ハ漢隸あり又周宣王の石鼓小其時の  
 史籀の作りたる篆文城用ひたるハ適當を共黃帝の  
 時の刀布周初太公九府の圜錢の文小秦の李斯小制  
 小篆城鑄りたるハ如何小ぞや時世前後錯乱顛倒甚  
 一但書ハ事城記載をるるを至簡の穴居結繩乃



世は歴て畫ふそとづきて聖人の制作あり後教聖人は  
重祓て完備せしものと思ふ處一篆書より草書は生  
ト草書より隸楷ハ出来り一なり真ハ立が如く行を歩  
むが如く艸ハ走るが如くなると云ふ因て草書ハ楷行の後  
ハ出来り一とある處より立行走ハ書札は學ぶ准  
次は論ずる言あり

畫圖の濫觴

畫ハ今日より見る時ハ呂覽勿躬ハ史皇作圖の言ありハ繪畫の祖と云き世用適切の技  
能ハ非ざるハ似たり是ハ深くおぼざるなり禮義文物ハ  
聖人の天子天下は治め上下は定免らる大用なり其弟

一ハ舜の禹ハ命せらる益稷予欲觀古人之象日月

星辰山龍華蟲作會とあり是畫の禮儀の重典ハ用ひて

闕くべからざるの證據あり周禮考工記并論語繪事杯

を禮典服章のことあるべき後世玩弄の山水花鳥を

是より胚胎をとおぼる春秋時世左傳の富艷なるハ

畫の事きこざる共沈諸梁葉公子高の畫龍は好む

説ハ劉向の新序卷五ハ見由戰國ハ至てハ高貴の人の此

技は弄ぶまじりて今この諸侯の圖画は愛せらる能はあり

莊子ハ載を宋元君左傳史記共ハ宋ハ元公あり將畫圖衆史皆至

衆史ハ画工より史職中ハ在るものなり受揖而立舐筆和墨在外者半有一史







未央宮の左閣 小画必せり免らき後漢明帝光武の子 永平三年小光武の  
 二十八將云臺小描寫せり免らき一寺ハ勸懲の一端を  
 政刑大典小属を遊戯小ハ何ぞ

畫の徳世の治乱小預る事

書ハ心畫ありとつども能書云展觀して人意云感動する  
 ハ嗜好の同ドき人小止る處一画圖ふてハ人の心云移る事一目  
 撃手小ある故小賢知の上ふて是云省覽して戒警と云又  
 ハ言意の及ぶざる云補ひ速小人云啓發するの徳あり今二三云  
 此小掲て世小示を唐の太宗ハ睿明学識兼備する人主を  
 ましとる曾て明堂針灸圖云看る小因て罪人の背小答る云

傳らる貞觀政要 唐鑑

五代の周の世宗郭榮 夜書云讀て唐の元稹の

均田の易云觀て嘆稱一天下諸道小頒ち布て租賦云均

くせしむ温史及 五代志 唐の世小傳來して周公無逸の易あり唐書

玄宗の世小宋璟の奉り 歴世の觀戒と一貽さるる一そのあり玄宗初年

武后の乱云播ひ心云治道小専ら小せざる一且小ハ常り

ころ云云坐側小置て民生艱難云忘まざるの箴と云後天

下井平富庶の世とあり是云撤して山水の易小之られ

るハ後云云と天寶安史の乱云醞釀一帝位云失ひ蜀

小奔竄云云困学紀聞の 采録小よる 宋の仁宗寶元の初農家耕織

勤苦の易云延春閣小画り一宋史小見ゆるハ真宗の朝小 孫奭無逸の易云奉り一と云 後世小



貽されしを哲宗仁宗より弟三世 神宗の子よりの元符間ふはまのわゆる山水  
 の名紙しをせし老仁宗哲宗世紙御せしもの勤惰きんせうを  
 推知るべし徽宗神宗弟十子 哲宗より嗣ぐハ風流伎能ふうりゆうぎのう不富とみなる性せいし  
 て書画小巧しやうこうあり蔡京童貫等さいけいどうくわんとうの姦人えんじんその嗜好しやうこう不投と  
 四方搜索しやうほうさく法帖名画紙募購ぼくくわん大觀たいくわん中ちゆう王黼わうふハ  
 勅ちやくして纂述さんしゆせし知らる宣和博古圖せんくはくこく宣和改元せんくわいげんより以前いぜんハ帝の  
 好事紙觀こうじくわんふ足る其考証こうしやうの疎繆そびうハ諸臣しよしんの欺瞞きまん紙知るべし  
 當時汴京へんけいハ画学の局紙開くわがくがくるまハ天下無事てんかむじの日ハ非  
 ざるふこの不急ふきゆうの道みちハ心紙委祿おごらる遂ついハ女真にょしん金國きんこくハ  
 攻らる其身そのみハ五國城ごこくじやうの幽囚ゆうきゆうとなるふ至る是ハ書画玩好しやうがわんこう

小耽り天下の大務紙遺失いしうせしハ依てあり元の曠の言ハ宋の徽宗 諸事ハ善くハ獨り君  
この事紙よきせしもの  
頂門の一針ていもんといふ  
 宋の神宗意紙銳えいし王安石紙用しやんせいいらる天下是てんかハ為な  
 小荼毒紙とたどく論辯諫ろんべんけん争そうするその何なにを帝曾ていそうて聽き  
 用もちひらる熙寧七年きやうねいしちねん去歲きよさい初秋しよしゆより雨あめあり此四月このしがつハ及および  
 旱魃かんさつ紙後ごハ因よて權けんハ新法紙罷やめらるまハ大雨紙  
 下くだし膏澤かうたくハ敷敷く是こハ司法參軍しふはふさんぐん鄭俠ていけつの流民りゆうみんの紙  
 進奏しんそうし天子てんし神感悟しんかんごハハハハ因よてあり其以こ法内新はふないしん  
 法の悪政あくせいハ征稅せいぜい苛急きやくハハハハ東北の流民りゆうみんのさる四  
 體顔色たいげんしきハ枯瘁こさいハ破やぶる衣服紙いふくハ身ハ鎖械さがい紙



被り瓦紙負ひ木を擔ひ老少相携一羸疾塞路その態  
の慘怛目元當そらまぬ紙其真小寫せ一鄭俠忠真の至  
誠よく天地紙感動せ一八画の徳小假ると云ふ一その後  
俠まゝ呂惠卿木の女姦惡天下の害紙を以て故ふ上疏と唐  
世魏徵及び姚崇宋璟又李林甫靈杞の傳紙取り画幅と  
あり是小題して正直君子邪曲小人事跡之圖と是  
紙其時の邪黨小比況して奏問と是を亦神宗の睿衷紙  
啓發せしことあり

安西帛吉著

附録畢

名家  
真跡  
款字式

雲煙子暮集



惺窩先生

如

冷泉為景卿惺窩先生之子

藤為景謹寫

藤樹先生

中江原拙稿

同

後和

林家道春先生

夕顏笑心字又

熊澤了芥翁

朱舜水先生

朱舜水先生

人見友元翁

年酒

陳元贊

既白山人

元贊題

芝山

貝原篤信翁

八十古翁益新書

安積澹泊

老圃安覺拜

貝原先生妻君江崎初女

东軒書



室駿臺

室道清

新井白石

中布

雨森東

芳海

祇園南海

步卿稿

柳原篁洲

勃宰若人

屈南湖

南湖

以上称木門五先生

祇園与一南海之子能梅花

餐壤故人寫記 室若

屈景山南湖弟

仁齋先生

伊上膝維楨題長汎書

東厓先生

仁齋先生四子竹里

伊藤長準中箱園生

宮崎常之進

徂徠先生

不

山縣周南先生

不

平野

金華平玄中子和父

縣考



春臺先生

安藤東野

宗字

萬菴和尚

宇佐美瀧水

宗字

大潮和尚

賣茶翁

宗字

趙陶齋

戴笠曼公

息心居士陶齋養篆

宗字

無隱道費

悟心元明

宗字

大典禪師

宗字

無難和尚

白川白幽子

漢興道人

宗字

風外禪師

宗字

雲居希膺

佐々木照元屋

宗字



龜田窮樂

窮樂一牛一力萬張

葛子琴

細合半齋

余能好字

春水弟仙嶺

春風

春風弟万四郎

賴惟未

賴春水

春風弟万四郎

尾藤孝肇

河城子律并題

村山退齋

濱田氏

杏半

野呂氏

長町

菜山氏

菜嗣燦

竹石

釧就

雲乃如寫

愛石師

高陽廷冲  
高陽山人戲寫



池大雅

辛卯仲夏寫

蓬平信州人大雅門人

墨

霞進者

蘇名

薰葭堂

吳齋

大島芙蓉妻  
羅井女

來禽

山林

名

柳里恭

公

壘嶂肯露謁

彭城百川

三熊海棠

做平山業

甲子夏日

彭真潤寫

思孝

但才

謝蕪村

西村氏

楠亭

寬政壬子仲夏寫

九主水

吳月溪

應舉

應舉寫

冬末初之

長澤氏

月

日春

以

駒井氏

源琦

山口

素狗

素狗



崎陽熊代氏

繡江熊斐寫 荃如蘭齋森又祥

井戸平助

越人森蘭齋

森祖仙

安藝岷山

祖仙 或 山 二 玉 鏡 寫 相

肥州人二川幸之進

熊櫻花寫真

桐隱公子

桐 隱 子 寫 卷 山 金子金陵 金陵寫

津山之臺山

金子金陵

金陵寫

何帛 光琳門人

平嵐浚明北越名家

太 青 何 帛 浚 明 寫

契冲阿闍利

契 冲 阿 闍 利 東 万 品 荷田大人

荷田

菅 在 滿 堆 之 學 同

吉川惟足翁

鳴島道筑

僧涌蓮

鴨祐為

存 之 末 希 仁 海

加茂縣居大人

釋澄月

釋大愚

今西行似雲

真 惺

逢 山 燕 延 似 雲 以 鹿

手島信



里村法橋

宗祇法師

長頭丸貞徳

經心之庵 延徳丸

齊藤氏

池田紫藤軒

井原三芳翁

安原貞徳子

徳元 言水 雅信 西鶴 白雲

松江重頼

青木氏

瀧野氏

秋色女

維舟 白梅園 鷺水 雲小 秋色

加賀人屋

五升菴

尾州人僧

鈴木氏

加源 蝶五 岳持 軍令 山美

沈氏花鳥

南嶺沈銓 南嶺沈銓寫

寓於皓月

伊葦野山水

山窗 伊葦野山水 持皓月

余崧北馬

秋亭 余山松寫

李用雲竹

信安 李用雲竹

高乾花鳥

浙西高乾寫

右款字式八真跡より模し七僅名家数人秋峯より別子近世名家落款譜撰多し是亦開彫近きより雲烟子識



安西雲煙著目

近世名家書畫談 前編二冊 後編四冊 出来發兌

同 三編 嗣出

真蹟清賞錄 二冊 同

雲烟雜錄 二冊 同

雲烟叢語 二冊 同

天保十五年甲辰六月

江戸

横山町三丁目

和泉屋金右衛門

藥研堀埋立地

和泉屋席 吉

大坂心齋橋

秋田屋太右衛門

江戸日本橋通三丁目

須原屋茂兵衛

同 二丁目 山城屋佐兵衛

同 小林新兵衛

中橋廣小路 西宮彌兵衛

芝神明前 岡田屋嘉七

本石町十軒店 英大助

淺草茅町三丁目 須原屋伊八

横山町三丁目 和泉屋金右衛門

發行

書林



